



平成25年度文化庁 文化遺産を活かした地域活性化事業

上廣歴史文化フォーラム in 白石

片倉小十郎景綱 ～ナンバー2の実像～

学会をリードする若手研究者が白石に集結！



仙台市博物館
市史編さん室長
菅野 正道さん

12月14日、「片倉小十郎景綱」ナンバー2の実像」と題したフォーラムを中央公民館で開催した。
このフォーラムは、学会の最前線で活躍する若手研究者が片倉小十郎景綱をメインテーマに据え、戦国大名と最も重きをなす家臣「ナンバー2」との関係を検証。伊達政宗と片倉小十郎景綱を中心に、上杉家、武田家、大崎家といった諸大名との比較を交えながら、分かりやすく紹介しようといわれたものである。この日は、市内外から約300人が来場。熱心にメモを取る人たちの姿も多く見受けられ、関心の高さがうかがえた。

「再検証・片倉景綱」
片倉小十郎景綱の通説に疑問

菅野さんは、片倉小十郎景綱と伊達政宗との関係を、通説とは違った視点から検証した。伊達家の記録では、景綱は米沢八幡宮の神官の子と言われているが、その系譜を見ると、神官の子ではなかったことを説明した。景綱の父景重は、神職の娘と結婚したため神官の地位に就いたが、後妻との間に授けられた子で、その時はすでに父景重は神官ではなく、片倉家とは、代々神官の家柄で

はなかったと話した。
その一方で、天正2年ごろに作られた置賜地方の伊達氏家臣の動員兵力を記した記録には、片倉姓を名乗る家臣が何名かいて、その中でも景綱の叔父にあたる片倉忠岐（片倉景綱）が一番多い兵力を指揮下に置く有力家臣であったことが記され、景綱の出自が神職ではなく、伊達家臣団の中で大きな勢力を持つ一族であったことを説明した。
一般的に、ナンバー2としての景綱は、政宗と常に行動をともにする側近や軍師、参謀として捉えられるが、特に、天正14（1586）年に大森城主となった以降は、自領の経営もあり政宗の側を離れることも多くなり、側近とは言い難く、実は、景綱が大きな役割を果たしていたのは外交だったと話した。
最後に、「景綱が政宗の軍師・参謀であったか」という疑問。はじめの一時期を除くと内政にはほとんどタッチしていない。戦の際も、自ら大きな軍団を率いて参陣するような軍師の立場とは違う。ナンバー2と言われているが、伊達家内での家格は重臣約20人中16番目くらい。それでは、なぜ彼がナンバー2と言われるようになったかという点、実は外交面での活躍が大きい。景綱は、多くの戦国大名やその重臣と書状を交わし、伊達家の外交担当者として外務大臣の役割を果たした。豊臣や徳川との外交でも、景綱が窓口となり書状を取り交わし、政宗とともに外交担当者として上洛している」と、片倉小十郎景綱のナンバー2の実像に迫った。

「武田家臣団の成り立ち」
武田家にはナンバー2がない

小佐野さんは、武田信玄とその家臣団について講演。武田家は守護大名から戦国大名になった家で、守護大名家のナンバー2とは家宰（領国支配、家臣団統制、外交などあらゆる権限を代行していた存在）であったことにはふれた。そして、15世紀半ば過ぎ、守護代であった跡部氏がクーデターを起こそうとし、守護の信玄と家宰跡部とが対立したが信玄が勝利。戦国大名化への基礎となったことを説明した。

続けて、家臣団編制の全貌は不明だが、内政や領域支配を担当していた御譜代家老衆と、軍事や外交に参与していた御一門衆という人たちが編制されていたこと、家臣の中の特定人物に権力が集中しないようにしていたことなどにふれ、「武田家は、もともと守護代跡部氏の反乱を鎮めたことで確立された国。信玄は、ナンバー2などのように、ある特定の人に権力が集中してしまうとクーデターを起こされる可能性があると考えた。それを防ぐためにも権力を分散させることで、あえてナンバー2を作らせなかった」と武田家の成り立ちから家臣団の関係などを話した。



東北大学大学院
文学研究科専門研究員
小佐野 浅子さん

また、兼統の下に実務を担当する与板衆などがいたことにもふれ、「上杉家を現代の株式会社にならせると、謙信は社長であり実務もこなす、景勝は会長で、経団連などに出向き国政を行う、兼統は社長で、他社との交渉や自社内の統括をする。実務を担当する部下もいた」と上杉家における主君と家臣の関係を分かりやすく例えた。



上越市公文書センター
公文書管理係長
福原 圭一さん

「上杉家のナンバー2・直江兼統」
イメージ通りのナンバー2

福原さんは、上杉家の直江兼統（樋口与六）が上杉景勝の側近を勤め、常に景勝とともに行動する、まさしくナンバー2であると説明。兼統は、低い身分にあつたが、上杉謙信の跡目争いである「御館の乱」で景勝とともに戦った。その後、謙信の側近であった山崎秀仙が殺された「山崎秀仙惨殺事件」で、ともに命を落とした重臣直江景綱の家の名跡を継ぎ、直江姓を名乗ることとなると同時に、景綱の領地と家臣団（与板衆）、そしてその地位を獲得。兼統は内政だけでなく、狩野秀治とともに外交にも携わっていたが、秀治の病死をきっかけにひとり立ちし、ナンバー2の地位を確立したことなどを話した。

「大崎家の外交と氏家吉継」
ナンバー2と外交

遠藤さんは、現在の宮城県北部を領していた大崎家の重臣である氏家吉継について講演した。氏家はもともと大崎の執事的立場の重臣で、その戦国末期の当主が吉継。吉継は、内乱を外交の力で沈静化させており、景綱同様、外交面で大きな役割を果たしていたと説明した。

続けて、天正14年にはじまる大崎合戦で、吉継の一派は他国の大名である伊達政宗を頼り、その結果、政宗は援軍を出すことにしたが、これは、吉継の要請があつた点を指摘。また、天正16年に政宗は、自身に味方をした大崎家中に所領を認めているが、この背景にも吉継の関与が考えられると話した。このほかに、翌17年には大崎義隆の代理で、和睦交渉のために米沢の伊達政宗のもとを訪れ、彼がその外交力で味方の保障を取り付けていることが分かったと説明した。
結びに、「吉継がナンバー2であること決定づける資料などは見つかっていないため、確固たるナンバー2がいたとは言えない」とし、今後、個々の事例をさらにひもといていく必要があるとの見解を示した。



弘前学院大学
社会福祉学部講師
遠藤 ゆり子さん

パネルディスカッション
「ナンバー2の実像」

講演会の後、福島大学人文社会学群行政政策学類准教授の阿部浩一さんをコーディネーターに迎え、講演を行った方々をパネリストに、ナンバー2の実像についてパネリストたちが諸大名の研究を通して考えを語った。

遠藤さんは、「大崎家にはナンバー2が誰なのかを記した資料自体がほぼ残っておらず、大崎家では外交を通して家臣団の信頼を得た氏家吉継がナンバー2に近い」、小佐野さんは、「武田家は内乱を治めたことで国が統一された国。国内のクーデターを未然に防ぐため、あえてナンバー2という存在を作らなかった」と話した。

また福原さんは、「上杉家には直江兼統という確固たるナンバー2がいた。その条件は実力があり、他国から認識され、当主・家臣から信頼されていること。これらが欠けるとナンバー2とは成り得ない」と話した。次に菅野さんは、「景綱も福原さんの言う条件を満たしている。しかし、当主の違いや家柄、家臣団の違いなどがナンバー2の果たす役割を決定する要因ではないか。ナンバー2とは、当主・家臣・時代などによって多種多様で、1つのイメージに確立するのは難しい」と話した。
結びに阿部さんが、「今後もこうした研究を進め、新たな歴史像を示していきたい。そして、多くの人に感心を持ってもらいたい」と締めくくった。